自由記述法による過去・現在・未来の自己イメージの特徴

○喜田安哲¹・金子由起²(非会員)

(¹ 恵泉女学園大学人間社会学部・² 知覚・言語障害教育研究所)

キーワード: テキストマイニング・年代別・肯定的／否定的文

Self-images in the past, the present, and the future using a text mining approach

Yasunori KITA¹, and Yuki KANEKO^{2, #}

(¹ Keisen Women University, ² Educational Research Institute for Perception and Language Difficulties)

Key words: text mining approach, intergeneration, positive / negative evaluation

目 的

自己イメージは、他者との相互作用を通じて意識化された社会的な自己 (social me) であり、社会的に形成されると考えられる。他者を信頼し、他者から信頼される関係は、社会的に形成されてきた自己イメージが中継ぎとなっていると考えられる。本研究は、過去、現在、未来における自己イメージの特徴について、自由記述による文章データをテキストマイニングで分析し、信頼形成を中継ぎする自己について基礎資料を得ることを目的とする。

方 法

- a. 回答者
10～50 代までの男女 271 人 (男性：78 人・女性：193 人)
- b. 調査実施期間
2009 年 9～11 月の約 2 か月間に実施した。
- c. 調査内容
過去・現在・未来の自分について、どのようなイメージを抱いているかを自由記述式で回答するアンケートを作成した。質問は、「あなたが思う〔過去の私〕〔現在の私〕〔未来の私〕について作文してください。」であった。
- d. アンケート調査手続き
アンケートは直接配布、電子メール、Mobile 通信機器、郵送、FAX 等で実施した。箇条書きや単語での回答は避け、文章で記述してもらうように依頼した。
- e. 分析方法

自己評価の自由記述文から、評価 (肯定的 (Positive : P)・否定的 (negative : N)・中立的) に分類し、[P] と [N] の回答者数を時間的位置 (過去・現在・未来)、年齢 (10・20・30・40・50 歳代)、性別 (男・女) でそれぞれ χ^2 検定を行った。その後、年齢 (年代) × 評価 (肯定的・否定的) 別に記述文のテキストマイニングを行った。テキストマイニングでは、形態素分析を行い、分析対象とする品詞 (名詞、形容詞、動詞) を抽出し、抽出した形態素で頻度の高いものを対象に対応分析を実施した。対応分析に用いた形態素は出現頻度が 2 以上のものとし、形態素数が 100 を超える場合には、100 以下で高頻度の形態素に絞って分析を実行。テキストマイニングの実行には、統計ソフト R、形態素分析ソフト McCab (RMcCab) を用いた。

結 果

年代別・時間的位置別・性別における評価の肯定について χ^2 検定を行った結果、年代別、時間的位置別において有意差が認められた。すなわち、自己を肯定的に評価、否定的に評価する人の割合は年代別、時間的位置別と関連があることが示唆された。

肯定的な回答文を年代別に分けて形態素分析および対応分析を行った結果、いずれの年代においても肯定的文と否定的文において時間的位置の重心距離に似た傾向が現れた (図

1：肯定的／図 2：否定的)。プロット図では、文章で用いられた形態素が重複して用いられるほど、その形態素は中心に多く集まり、関連して用いられているほど形態素間の位置が近くプロットされる。肯定的な文では、いずれの年代においても、用いられる形態素が均等に分散し、各時間的位置の重心が均等にばらけた。これに対して、否定的評価文で用いられる形態素の時間的位置の傾向は、過去の重心が中心に近く、現在の重心も過去の重心に近いのに対して、未来の重心が離れた傾向が見られた。

図 1 10 代〔肯定文〕における対応分析結果

図 2 10 代〔否定文〕における対応分析結果

考 察

対応分析の結果、年代ごとに用いられる形態素の傾向は異なるものの、肯定的文、否定的文のそれぞれで用いられる形態素の関連性には共通の特徴が表れた。肯定的文で用いられる形態素は過去・現在・未来が比較的独立しているのに対して、否定的文では過去で用いられる形態素が現在と関連度が高く、未来がかけ離れた。否定的な自己評価は過去と結びつく傾向が強いことが示唆された。